

16世紀『嘉靖大倭寇』を構成する諸勢力について

秀城 哲

はじめに

いわゆる「倭寇」とよばれる海賊は中国の明朝期を通して東アジアの海上に活発な活動を展開し、各地域に重大な影響を与え続けた。とくに明朝史においては北のモンゴル＝「北虜」に対する「南倭」として国家の重大な問題であり続けたことは良く知られている。

この倭寇についてはわが国でも戦前以来の多くの先学の研究がなされてきたが、おおむね14世紀～15世紀に活動し朝鮮半島から中国黄海沿岸を襲った倭寇を「前期倭寇」、16世紀に活動し主に中国中南部を襲った倭寇を「後期倭寇」とする定義はほぼ一般的となっている。そしてこの「後期倭寇」についてはその構成員の多くが、当時の史料によれば8割から9割が明出身の人間で占められていたことが注目されており、日中交渉史だけでなく中国史の枠組みからもこれまで様々に検証がなされてきた。

「後期倭寇」の実態を多くの史料を駆使して考察・総合した先駆としては石原道博の『倭寇』⁽¹⁾があり、その大半が明人であり日本人は少数派であったこと、一般に流布する「倭寇の残暴」には事実無根とまでは言えぬにしてもイメージ先行のきらいがあること、そして「倭寇」を生み出す原因となった密貿易従事者や密貿易に関与する地方郷紳層の活動、「倭寇」に協力していった「偽倭」「従倭」「仮倭」「奸細」といった人間たちの存在など、多くの事例を挙げて「倭寇」の複雑なイメージを浮き上がらせていた。

「後期倭寇」に明の密貿易業者などが多く含まれていたことから、これを中国史における階級闘争の一種と見なす見解も、わが国では1960年代に片山誠二郎によって唱えられた。片山に見るような「後期倭寇」を「中小密貿易商人が連合して搾取する郷紳

層に対して起こした闘争」に沿海の貧民などが加わっていったものとしたが、こうした見解は中国の研究者においても同様のものが見られ、いわゆる「資本主義萌芽状況」を背景に明朝政府の海禁政策との矛盾が激化した現象が「後期倭寇」であるととらえ、階級闘争史観的立場から「後期倭寇」の活動を「反封建の人民闘争」として積極的に評価する傾向すら多く見られた⁽²⁾。

1980年代まで日中ともに似た傾向をもつ「後期倭寇」評価がなされてきたと言えるわけだが、最近では両国の学界それぞれで「倭寇」像のゆらぎが見られる。中国においても「後期倭寇」に「真倭」つまり「日本人」が含まれていることを重視し、かつ「大倭寇」にみられるような大規模侵攻の実態もふまえて、「後期倭寇」に対する評価を改める動きも起こってきている。また日本においては村井章介『中世倭人伝』などにより「倭寇」を国家・国境をまたぐ地域に活動する人々＝マージナル・マンとみなす見解が提示され、また荒野泰典が「倭寇の状況」と呼んだ多民族雑居状態の「環東シナ海世界」の想定などにより、「倭寇」ととどまらず「倭」そのものの定義にも新たな視座がもたらされてきている⁽³⁾。

「倭寇」をめぐる研究の難しさはその実態が海を越え国境をまたいだ多民族雑居の状態であること、そのものにある。しかも彼ら自身が歴史の記録者になることはなく、主にこれを危険視・鎮圧する陸上の権力側からの視点のみの記録が残されることになる。そうした性格の史料の記述をもとに「倭寇」像を構築することは慎重な姿勢が要求されよう。

本論文では「後期倭寇」と呼ばれる16世紀半ばの明・江南地方への「倭寇」活動、しばしば「嘉靖大倭寇」と呼ばれる侵攻活動をテーマに取り上げてい

る。「前期倭寇」も含めた「倭寇」史の中で、特に大規模かつ深く内陸に分け入った侵攻活動であり、しかもこれまでの研究史においてしばしば注目されたように構成員の多くが明出身の人間であり、明国内の社会問題と深い関わりを持っていることに大きな特徴を持っている。先行研究においてもこの「嘉靖大倭寇」の要因は当時大規模に展開されていた密貿易活動と明朝の海禁政策との矛盾にあることについては議論の余地がないほどに指摘されてきたが、これがそれ以前と以後の「倭寇」とは大きく異なり、江南地方全体にわたる大規模な騒乱に発展した事情については依然として綿密な考察がなされていないように思われる。

この論考ではまず「大倭寇」の発生に至る過程を整理し、さらに「大倭寇」の急激な発展過程を眺めて、そこに「大倭寇」に参加していった江南地方の様々な勢力の存在を見出し、それらについての考察をしていきたい。

(1) 江南地方在地人の参入による「倭寇」規模の拡大

一般に「嘉靖大倭寇」と呼ばれる「倭寇」の大侵攻活動は嘉靖32年(1553)から開始されると見てよい。むろんそれ以前にもいくつかの「倭寇」あるいは海寇の寇掠活動が見られるが、『世宗実録』や『嘉靖東南平通録』『倭変事略』といった史料の倭寇記事はいずれも嘉靖32年の2～4月から連続的かつ多発的な寇掠活動が開始されたことを記している。

『世宗実録』ではこの年の閏三月甲戌の記事で「海賊汪直、漳・広の群盗を糾し、各島の倭夷を勾集して大挙入寇す。連艦百余艘、海を蔽うて至る」と記し、この記事を受けた『明史』日本伝などでもこの年の閏三月をもって王(汪)直が海賊・倭人を糾合して大群で押し寄せてきたかのように記している。王直とは言うまでもなく徽州出身の密貿易商人の大家であり、対抗勢力を打倒して当時の海上において並ぶものがない威勢を誇っていた。しかしこの「大倭寇」が始まる年の3月に王直は密貿易の拠点としていた舟山群島の烈港を官軍に急襲され、烈港を破壊されて自らはかろうじて逃亡している。まさにその直後から始まる「大倭寇」の原因がこの官軍の攻撃にあるのは間違いなく、王直自身が直接関わっていたかには疑問もあるが、その配下にあった者の一部が報復的に寇掠活動を行ったということは容易に想像がつく。

しかしこの『実録』の記事は後年王直が倭寇の首魁として断罪された以後に編集された疑いが強いものであり、事実と断じることには慎重にならざるを得ない。少なくとも「海を蔽うて」というような大挙襲来でなかったことは現地の史料などからも推測できる。

特に海塩県における倭寇活動を詳細につづった『倭変事略』によると、この年に海塩周辺に出現した「倭寇」の規模について、4月に最初に上陸したものが40名、5月に7隻の船に分乗した数百人の集団があり、同じ月に海寧方面からの「流賊」70余名、8月に「三倭船」に乗った200人、などが記されており、いずれもせいぜい数十人単位の集団が複数横行し、合わせても数百人といった程度の規模に過ぎない。同じ傾向は同時期のより広い地域を扱っている『嘉靖東南平倭通録』にも見え、こちらではこの年の4月に呉淞・南匯所などを襲った蕭頭率いる集団について400人という規模を記し、海塩・平湖を攻撃した「失船倭」については40人と記している。こうした数十人単位、糾合して数百人といった「倭寇」集団の規模の由来は恐らく船一隻の乗員数と関係があると思われる。

ところで「倭」や「賊」など様々な表現をされているこれら「倭寇」集団が、実際に日本から来た「真倭」を中心としているとはこれら史料の記録者たちも見なしてはいなかった。『倭変事略』では最初に海塩沿海に上陸した「倭寇」が「日本人」の漂着者を装ったことを記しているが、その後これら「倭」が立ち去った廟堂の壁に漢詩を書きつけていった者があったことを記して「多くは中国不逞の徒に由り、衣冠失職の書生の志を得ざる如きの者、其の中に投じ、これの奸細と為る」という鄭端簡らの意見を紹介して「この四十賊を観みるに亦た能く題詠する者あり。則ち乱を倡える者はあに真倭の党なりや。厥の後、徐海・王直・毛烈ら並べて皆華人なり。信ず可し」と、これら「倭寇」の多くが「華人」であったことを示唆している。

当初は小集団であった「倭寇」が急速に規模を拡大していったことについては『嘉慶松江府志』卷三十五武備志・兵事に「徐御史宗魯、倭変始末を論ず」として以下のような文がある。

寇起りて四年、初めは十を以て計う。漸く数百数千の衆きに至る。今則ち聚りて幾万を為す。始め一方を寇して沿隣邑旁郡の間に次り、猶お顧忌を懐く。今歳は則ち浙の東西、江の南北に満つ。名は倭寇と雖も実は漳泉寧紹の民の勾引して乱を為す。今歳は客兵の附党、郷民の投入多し。昔は但だ剽掠して毎ごとに郊野海浜の区に竊窺し、飽けば即去せんと欲す。今歳は則ち郡邑の城池を攻め腹裏の内地に拠る。

「寇起りて四年」とあることから、嘉靖31年から四年後の嘉靖35年(1556)ごろの文であると思われる。実際、嘉靖35年ごろは徐海らによる数万単位の倭寇集団が江南地方を荒らしまわった、「後期倭寇」の最盛期とも言える年である。この段階において徐宗魯は「倭寇」が当初は「十を以て計う」

ほどの小集団であり、各地を転々と寇掠する程度の活動であったと述懐している。こうした「大倭寇」当初の「倭寇」の小集団・散発的な活動ぶりは『倭変事略』等が記す具体例とも一致しており、実態を正確に描写したものであると思われる。

この文の中で徐宗魯もこうした「倭寇」集団について名は「倭寇」と言いながら（この一節で当時実際に人々がこれら海寇を「倭寇」と呼んでいた事が確認できる）実際には漳州・泉州・寧波・紹興の民が勾引したものであるとの認識を示している。「漳泉寧紹の民」は前章で触れたように当時一般に密貿易に携わっていると思われていた人々であり、密貿易活動が「倭寇」の呼び水になっていること、そして「倭寇」自体にも彼らが多く参加していたことをうかがわせている。

しかし「今歳」になって「倭寇」集団が次第に数方に至るほど数を増し、浙江の東西、江南・江北に満ちるほどに成長し、さらにはその活動の形態自体が内地に拠点を構えた大規模なものへと変化していったことについて、他地方から鎮圧のためにやってきたはずの「客兵」の「附党」やその地域の「郷民」の「投入」といった「倭寇」勢力への新規参加がその要因であると徐宗魯は言う。彼らは本来密貿易とは直接的な関わりは無く、「大倭寇」の寇掠活動に初めから関わっていたわけではないが、次第にこれに加わっていったのはなぜなのか。これをいくつかのケースに分けて以下に考察する。

（2）倭寇活動への参加の諸形態

①客兵の参加

客兵とは反乱などの鎮圧にあたって、他の地方から動員されてくる兵士を指す。これについては『籌海図編』巻十一・経略一に詳しい説明があり、広西の狼兵、湖広の土兵、河南兵、鉞夫、打手、北方兵、僧兵、福兵・漳兵、坑兵などが列挙され、それぞれに長じた技を持ちそれが「倭寇」鎮定に利用されていたことが知られる。特に広西の狼兵部隊の活躍については『倭変事略』等にも詳細な記述があり、戦力として大いに活用されていたことがうかがえる。

しかし一方で官憲においてこれら客兵に対して警戒し、危険視する意見も少なくなかった。特に狼兵（チワン族？）や土兵（ミャオ族など）といった少数民族の戦力動員については「夫れ苗を以て倭を攻める、なお毒を以て毒を攻めるがごとし。軽しく用いるべからず、また久しく用いるべからざるなり」（『籌海図編』調客兵に載る都御史章煥の意見）といった、偏見から来るとも思える警戒感が見え隠れする。また他地方から来た客兵が江南の軍民とトラブルを起こし「婦女を淫し貨物を劫し良民を殺す。かくの如ければ則ち客兵の乱は倭夷と等し」（同上）といった事態も懸念、あるいは事実として起こって

いたようである。

いくつか挙げられている客兵動員の弊害の中で、徐宗魯のいう「客兵の附党」すなわち「倭寇」鎮圧にきたはずの客兵が「倭寇」側に参加してしまうという事態も確かに存在した。特に警戒されたのは福建から動員された福兵・漳兵で、『籌海図編』の客兵附録には「嘗て水戦を習う間に、その内多く海寇に従い奸利を行う者なり。多く海寇に習い闘う所諸兵中において最たり。特に令を知らず、調するところの者は若干のみ」とあり、その水戦における戦闘力を利用しつつも、彼らが「海寇」と深く関わる者たちであることから警戒視していたことをうかがわせている。これら福建方面の客兵たちが実際に「倭寇」側と内応した実例としては嘉靖33年4月の孟家堰の戦闘が挙げられる。『倭変事略』によればそれは以下のような経緯をたどった。

盧（盧鏜）は徽商の舍に宿る。一漳兵、銀栢を竊め、盧、橋に斬らしめ以て徇う。士卒皆悦ばず。軍中に漳兵有り、遂に盧を怨み、乃ち陰かに賊と通じ、先に伏を設けて陣に臨んで伴って潰せしめ、且つ賊の撃殺を助けんとす。兵の孟家堰に至りて、河を夾みて戦う。賊、我軍を誘いて伏内に入らしめ、四面攻殺し、掌印指揮李元律、処州薛千戸及び千総劉大仲、皆立ちどころに之に戦死す。盧に馬の能く渡江する有り、一家丁が馬を控え、盧、附馬して渡り、免を獲る。…（中略）…議する者謂う、孟家堰の役、戦の罪に非ず、漳兵の己を売るに由ると。倭党中に多く漳人の有る故に縁るなり。

盧鏜は福建出身の武官であり、双嶼攻撃にも参加した当時の有力指揮官の一人である。彼の陣営で盗みを働いた漳兵があり、これを軍律において処刑したところ士卒とくに同郷の兵士たちが怨みを抱いて「倭寇」側に内通し計略を授けて官軍を打ち破らせたという。この文の末尾にあるように、この孟家堰の敗戦理由について「議者」は戦闘における失敗ではなく漳兵が指揮官への怨みから「倭寇」に内応したことにあり、しかもそもそもその「倭党」中に同じ土地の出身である漳人が多いためにこうした事態が起こったと分析している。この文のみからでは判然としないところもあるが、これら漳兵も単に「倭寇」側に内応しただけでなくそのまま「倭寇」集団に合流した者がいたとみるべきだろう。

同じ『倭変事略』同年5月28日の記事には官軍の攻撃を受けて追い詰められた「賊」が巡司の後堂に入って抵抗し、張參戎が「部下四漳兵」に説得させようとしたところ彼らが賊と約して偽ってこれを逃がしてしまったという事件が書かれている。この「四漳兵」は間もなく賊の略を受けていたことが判明して斬刑に処されたが、ここでも『倭変事略』の

作者は「賊中に故より漳人多し。漳兵を用いてこれを勤す、焉んぞ事を償とさざるを得んや」と漳州人の客兵を用いることの危険性を指摘している。

ただし徐宗魯の言うような「客兵の附党」の明確な事例はこの二件しか史料中には見出せない。しかもその具体的な規模も不明であるし、「倭寇」にも多く含まれていた福建人、とくに漳州人の客兵以外で同様のことが起こるとはやや考えにくい。「客兵の附党」は事実としてあったであろうが、それはあくまで「倭寇」の急激な拡大と変質という大きな流れの中での小さな一要素であり、徐宗魯が強調するほど大きな現象であったとは考えにくい。

②奸細・土寇

「奸細」とはスパイあるいは内通者といった意味合いで使われる言葉であり、大明律などでは周辺異民族や外国と内通する者、あるいはその行為を指して使用されている。明末の混乱期に全土に「流賊」が横行した際、その手先となって攻撃先の城市で内応や工作活動をした「奸細」の実態については、吉尾寛氏による多くの事例を検証した研究⁹⁾もある。

江南地方を襲った「嘉靖大倭寇」においても「倭寇」の手先となって各種の工作を行う「奸細」の存在が史料中に散見されるが、その活動形態は吉尾氏が検証された明末の「流賊」のそれに近いのではないかという印象を受ける。

鄭若曾『江南経略』巻二・崑山県倭患事蹟には「知県祝乾寿大いに奸細を城中に索めこれを獲る」(嘉靖33年4月)と題する記事があり、以下のような経緯が記されている。

賊至りて三日、城郭を犯さず。人皆これを疑う。十六日、諸生の夙に興る者有り、馬鞍山嶺に白衣の人二を望見す。皆白扇を以て指揮す。其れ奸細を為すと意うなり。人を遣りて遍くこれを索めるも得ず。卒に鰲殼洞中に之き、執えてこれに訊するに曰く、未だ至らざる時、先遣の十輩を城内に伏せ、十五日を期して火を放ち夫の下城を誘い、間に乗じて登らんとするも、雨に因りて約を改む。今夕の白は吾の暗号なりと。祝公亟めて令を下し、およそ来歴不明の人、悉く獄に下す。枉有るを慮り、獄卒に命じて善くこれを護る。…(中略)…是の夕、奸細火を放ち、縛を受ける者八人。始めて擒える者は尽く奸細に非ざるを知る。奸細は或いは橋下に伏せ、或いは樹杪に棲み、或いは菴刹に隠れ、或いは林墓に潜み、夜聚まり曉に散じ、其の踪常無し。西倉の脚夫五十人、自ら相盟誓して要路に分伏し賊を俟ち、奇行する者これを擒う。劇賊一人を得る。祝尹、百方もてこれを誘うも終に言わず。肢解し以て徇う。既にして賊の流矢を得る。其の翎の細書に云う、「陸成已に殺さる、阿荒仔細」と。乃ち復た大いにこれを索む。数日、阿荒を濠間を得る。蓋し即ち県傍に

狗を屠る者なり。来たりて已に三年…。

この記事に現れる「奸細」を整理すると、①馬鞍山嶺から作戦中止の暗号を送った二人②城内に潜入し放火した先遣の十人③脚夫らに捕われた「劇賊」一人＝恐らく「陸成」④矢文で仲間と連絡をとろうとしていた「阿荒」、と分けられる。彼らの活動からすれば恐らくこれ以外にも多くの「奸細」が崑山県城を攻略するべく活動していたことがうかがえよう。

注目されるのは彼ら「奸細」が橋下、樹杪、菴刹、林墓といった人目につきにくい各所に潜伏し、夜間に集合したり白衣を来て暗号を送ったり矢文を放ったりと様々な手段で密に連絡をとりあう、神出鬼没ともいえる隠密活動ぶりである。こうした活動をするからには当然彼らは「倭寇」の「奸細」とは言いながら現地の事情に相当に詳しい人間でなければならない。彼らはもともとこの地域の住民ではないにしても「阿荒」のように三年前からここに居つてある程度定着していた人間であったと思われる。この「阿荒」にしても県傍で狗を屠っていたとあるが、「大倭寇」の発生する三年も前から「倭寇」の奸細となる目的でこの崑山に流れてきたものとも思えず、本来「倭寇」と深い繋がりのある人間であったのかどうか疑問を持たれるところである。

先に挙げた吉尾氏の明末流賊の「奸細」に関する研究では、それら「奸細」の多くは流賊の攻略目標となる現地の人間であり、彼らが抱える貧窮などの諸問題を流賊に呼応することによって一挙に解決しようとしたものだと言われている。この崑山県への「倭寇」のケースにおける「阿荒」や「陸成」といった「奸細」たちの素性はほとんど明らかではないが、彼らもまたこの地域において何らかの不満や問題を抱えて連携をとっていた集団であり、前年来の「倭寇」の襲来に呼応する形でこうした「奸細」活動を行ったものとみてよいのではないだろうか。

「大倭寇」の開始二年目となるこの嘉靖33年にはこのほかにもいくつか現地の住民が「倭寇」に協力したと見られる活動を確認できる。例えば『倭寇変事略』の同年6月14日の記事では「太倉・劉家河の寇」が「約千余」の規模で儀亭に到来したことを記して、

譚姓の家有り、米万石余を貯す。賊、居民を諭して石ごとに四銭を価す。民、往きて羅し、約の如くす。是に由て旬日にして米売尽くす。

と、「倭寇」集団が住民に金を払って有力者の家の米を奪わせこれを買占めたいという事実をさりげなく記している。これは必ずしも「奸細」活動とは見なせない事例であるが、現地住民が「倭寇」という事態に被害者になるどころかこれに呼応・協力して利益にありつこうとしていた例として注目され

るところであろう。またこの集団が「千余」というそれまでにあまりない大規模な集団であることも、これに参加する現地の人間が存在したことを予想させる。

同じ『倭変事略』のこの年の末の記事では「其れ沿海の窮民、また夜に貧し倭状を冒して劫掠す。海寇未だ除かれず、土寇繼いで作る」と記しており、沿海の貧民の中に「倭寇」の姿を借りて（これが具体的にどのような「倭状」なのか不明だが）便乗ともいえる劫掠活動をする者があったことを示している。こうした「土寇」については『江南経略』も巻一・兵務挙要の中で「土寇」という項目を挙げて「凡そ海賊一起すれば、陸地の賊、機に乗じて竊かに発す」とその冒頭に記している。こうした「土寇」はあくまで「倭寇」「海寇」に便乗した活動と見なされているが、中には実際に「倭寇」に糾合されていった者も少なくなかったのではないだろうか。

『籌海図編』の各倭変紀や『嘉靖東南平倭通録』にはまだ数十から数百人程度の段階の集団を率いる者として「二大王」「八大王」「劉鑑」といった「賊首」の個人名（あるいは呼び名）が記されていることがある。しかしその名前だけを記してその出自などに説明は無く唐突な印象を受ける。あくまで推測に過ぎないが、これらはもともとこの地域では名を知られていた塩徒や山賊の賊首であったものが「倭寇」に加わっていったものであったかもしれない。

③塩徒

塩徒とは塩の密売商人の集団であり、その無頼結社的性格からしばしば反乱活動の中核となることがあった。地方志などをみれば「倭寇」が到来する以前から江南地方の各所に塩徒の巢があったことが知られる。そして前項の最後にも推測したようにやはり「大倭寇」に彼らも参加していった可能性が高いと見られる。

『嘉靖東南平倭通録』嘉靖33年の記事（4月のあとに書かれているが、3月の事件に触れたもの）は「初め通州河の役、賊兵僅かに百余人、塩徒及び脅従者千余人」とあり、江北の通州河の戦闘においてわずか百余人の「賊」に「塩徒および脅従者」がそれよりはるかに多い千余人で従うという構成であったとしている。「脅従」は倭寇などが現地の住民を捕らえて強制的に協力させる意味合いで使われる表現であるが、実態としては自ら進んで参加しているケースも少なくなかったと思われる。ここでの塩徒と脅従者の割合は不明であるが少なからぬ塩徒が「倭寇」に合流していたことは事実であろう。この『嘉靖東南平倭通録』の同年3月の記事を見るとこの海門・如阜・通州などを寇掠したこの「倭寇」集団は「各塩場を焚した」とあり、塩徒反乱の側面もうかがわせている。

また、あくまで傍証であるが、『籌海図編』など

で「三丈浦の賊」などと表現され「倭寇」の拠点の一つとされる三丈浦について、『江南経略』には巻三・三丈浦險要図説に詳しく図が載っており「通州と対境す。私塩を販する者の江を絶ちて往来す」との説明がついており、ここが塩徒らの往来する場所であったことを伝えている。この他にも長江河口域の南岸部を中心に「倭寇」の拠点となった場所と塩徒の活動地は重なりあうところが多い。

④竈戸

竈戸は沿海にあって製塩を生業とする住民であるが、同時に燃料となる柴を刈ったり漁をするために海上で活動する人々でもあった。彼らはそうした生活のために密貿易とも深く関わり、かつ「倭寇」にも深く関与していたことが史料中から浮かび上がってくる。

『籌海図編』巻十一、叙寇原にこうした「竈戸」と「倭寇」の関わりについて重要な意見が載せられている。

海道副使譚綸云う、片板も下海を許さず、双?大船を禁革す、乃ちしばしば朝例を明らかにし以て禍の未だ萌さざるに銷す、深遠に至ると意うに、奈何ぞ沿海の竈丁、仮に採弁を以て大船を私造し禁を違えて下海す。始めは則ち魚を取り継いで則ち接済し、甚しきは則ち通番す。十数年来、富商の大賈、利を俸り交通して、番船海に満ちる。間に朱秋崖の任有り、之に事えて臣力めて行禁捕を行う。而して大家の竈戸、浮議横生し、小民の以て聊生無しを曰わず、則ち国課の必ず虧損を致すを曰う。之に加えて監?の憲臣、竈戸を偏護し、過ぎては刃官を抑え小愆をし節次に論劾す。海道備倭の勘斥相繼ぎ、遂に禍を避け遷就するに至る。海禁いよいよ墮（やぶ）れ、大禍を養成す。敢言有る者莫し。往年の倭寇、漁船を劫掠し逼りて党羽と為す。既に其の船を得て以て声勢を張る。又は其人を駆りたてて以て嚮導と為す。蘇松の寇、半は皆脅従・捕獲・有賊にして尤も竈戸多し。

譚綸はこの前段において「片板も下海を許さず」という厳しい海禁政策下において沿海の竈戸が「採弁」を理由に大船を私造し下海していた事に触れ、これが初めは漁業、やがて密貿易船に物資などを売る行為である「接済」に及び、甚だしくは自ら「通番」、密貿易をするに至ったというプロセスを示している。十数年来に密貿易活動が活発化したため朱統による双嶼掃討が行われて譚綸も海上活動の禁捕に務めたが、「大家の竈戸」が海上活動の制限が彼らの生活の妨げになるだけでなく製塩に支障をきたして国課に損失をもたらすと抗議し、これに加えて「監?の憲臣」も竈戸らの主張の肩を持ったため海禁は結局破られてしまった、というのである。その

結果が「往年の倭寇」であり、蘇州・松江を襲った「倭寇」の半ばはこれに「脅従」した、もしくは「捕獲」された、あるいは彼らの奪ってきた金品を隠し持っていた者たちであり、それらの多くが竈戸であった、というのである。

都御史朱紘が嘉靖27年に当時の密貿易の拠点であった双嶼港を掃討した際も「平時海を以て家と為すの徒」が「邪議蜂起」して官軍を動揺させたことが記録されている。これらが竈戸であったと明記があるわけではないが、譚綸のいう「大家竈戸の浮議横生」とよく呼応していることに気づかされる。「竈戸」も「海を以て家と為すの徒」の類であったと見てよいだろう。彼らのような海禁下においても海に出る自由をある程度認められていた者達が密貿易に関わって利益を得ており、その密貿易活動が官憲によって禁圧されたときに、彼らが「倭寇」へと合流していくことは自然なことであったとは思える⁹⁾。

⑤沙民

長大な長江は大量の土砂を運び、「沙」と呼ばれる陸地をその河口域に出現させてきた。現在巨大な崇明島が形成されいくつかの「沙」が残るのみとなっているが、この水域の「沙」は長い歴史の中で消長を繰り返しており、特に明代中期から清初にかけて数十もの「沙」が出現・消滅を繰り返し、唐代から置かれていた崇明の県城も明代には水没のために4度にわたって移転を余儀なくされるほど(特に嘉靖年間から万暦年間までの約半世紀に3度も移転している)激しい変化を見せていた。

このように消長の激しい崇明付近の「沙」に住む人々(ここでは一括して「沙民」と呼ぶ)は流動性のある、不安定な存在にならざるをえなかった。万暦新修『崇明県志』巻一・風俗には「崇人は自ら耕稼漁樵するより外、別に他業無し。故に游民多く、或は打行を習い、或は賭博を攻め、盗みを為し姦を行う。大率みな此の類なり」とあり、また『明実録』弘治十八年(1505)二月丙寅の巡撫応天等府都御史・魏紳らの上奏には崇明の住民について「海洋の民、習性は貪悍、闘を好み生を軽んじ、中間に盗を為すの徒多く、起ちて利を争う」と記し、彼らの中に盗賊の類となる者が多く存在していたことを指摘している。塩分を多く含んで農耕には適さなかったとされる「沙」においては漁業と共に製塩が主要な産業であったようで、必然的に彼らは海上に生活の基盤を置き操船技術に優れ、「風濤出没、長技を独り擅にす。此れ其の民、これを善に駆りたては則ち難にして、これを悪に縦てば則ち性然のみ」と実際に近隣に住み『籌海図編』『江南経略』の著者であり倭寇対策にもあたった鄭若曾も評している。この点において沙民は先述の「竈戸」とよく似たこうした特性を持っていたと言える。

実際にこうした「沙」を拠点とした反乱活動が「嘉

靖大倭寇」以前の時代にしばしば起こっていたことが地方志などによって知られる。特に大規模であったのは「大倭寇」時代の直前とも言える嘉靖19年(1540)の「秦璠・王良の乱」で、彼らは崇明付近の沙の一つである「南沙」を拠点に「魚を捕り塩を煮て奸を為す」(『太倉州志』)という活動をし「壮丁を蓄え巨艦を備え魚塩を載せ、近洋に泊して小舟を以て分載して入港し、州守以下に賄す」(『崇明県志』)といったように、官憲にも贈賄して海上活動の自由を得ていた。彼らは最終的に官軍によって討滅されたが、泥地など沙の地形を利用した戦法により官軍を一時は破っており、また彼らが拠点とした南沙には少なくとも二千人の「男女」の住民が存在しこれが彼らの活動を支えていたと思われる節があるなど、沙と沙民に基盤を持つ反乱活動であったことは、後述の「大倭寇」における沙の情勢と絡めて注目されるところである。

その後嘉靖32年4月に「嘉靖大倭寇」が発生するが、その先陣を切り、王直とも深く関わる人物であったと推測される賊首・蕭頭が、秦璠・王良と同じくこの南沙に二度にわたり拠点を構えていることは注目される。『江南経略』などの記事によれば蕭頭らは五百余の勢力で南沙に上陸し、ここに官軍が蓄えていたものと思われる「積粟」を手に入れ、沙の地形を利用して伏兵を駆使するなど激しく官軍に抵抗した。さらには官軍の動向を偵知した蕭頭が「各沙の新賊を招集」したと『江南経略』は伝えており、南沙以外の「沙」に彼に呼応しうる勢力がいたことを示唆している。また7月に南沙に入って官軍に包囲された蕭頭はその年の暮れまで約五ヶ月間もここに立てこもり続けており、彼らを陰から強く支える南沙の住民の存在があったことを推測させる。

『籌海図編』で「善戦多謀、王直も憚ってこれに譲る」と記された蕭頭はその名はしばしば資料中に明記されるものの出身や実態が全く不明の人物である。先に「土寇」についての考察でこのように名のみ記されるものの詳細が不明の「賊首」たちはもともとその地域で「賊」として名を知られたものではなかったかとの推測を行ったが、あるいはこの蕭頭も以前から「沙」を拠点に活動して名を知られていた塩徒の類ではなかったかとも考えられる。王直との人脈的繋がりには彼が密貿易とも関係を持っていたことを示唆していると考えられ、沙の住民が密貿易に参加していた可能性をも想像させる。嘉靖32年に王直の拠点・烈港が官軍の襲撃を受けた直後に蕭頭の寇掠活動が開始されることも、こうした推測を補強するものとなる。

蕭頭以後も嘉靖33年から34年にかけて、崇明付近の各沙にはしばしば「倭寇」とされる「賊」の上陸、攻撃が繰り返された。中でも蕭頭も立てこもった南沙に上陸したものが「尤も衆し」と『江南

経略』は伝えている。そして「大倭寇」がピークを過ぎた嘉靖38年4月にも三沙から三沙に上陸した「倭寇」があり、彼らは最終的に三沙に立てこもって官軍に抵抗した。この戦闘の様子は『江南経略』崇明県倭患事跡が詳しく伝えているが、「賊、多智にして猛く、我が兵常にこれに怯える」と官軍が葦原などの伏兵を恐れるなど非常に慎重な戦法をとったことを記し、「沙中の大家、また賊の奸細となり、かえって賊勢を揚げ我が軍を恐怖する者なり」として、この沙の住民、しかも有力者が「賊」側の奸細となるケースすらあったことにも言及している。

沙民の活動地域はあくまで長江河口域付近に限られるため、彼らのどれほどが「倭寇」に参加していたのかを明示するのは難しい。また逆に鄭若曾などは『江南経略』においてしばしば彼ら沙民を倭寇対策に利用しようという意図を示すのだが、例えば同書所収の「沙船論二」において「盗を捕らえる者は沙船なり。盗を為す者もまた沙船なり。海寇生発の時少なく平靖の時多し」と記し、沙民の使用する沙船が海寇の側にも使用されていること、それはひいては海寇（倭寇）側にも彼ら沙民が多く参加していたととれる発言をしている。

むすびにかえて

以上、江南地方における「嘉靖大倭寇」の急激な規模の拡大の実態と、その拡大の原因となった各種勢力—客兵、奸細、塩徒、竈戸、沙民など—の「倭寇」への参加の状況について検証してきた。本論文では紙数の問題もありこれらの勢力の列挙にとどまり、当時の江南地方の社会状況と彼らの間にいかなる矛盾があったのかといった問題についてまで深く考察することができなかった。ここではこれらの様々な勢力がそれぞれの事情において「倭寇」という外来の刺激に反応し、それぞれの方法において「倭寇」に参加し、「倭寇」を「大倭寇」と呼ばれるほどの大規模かつ激しい活動へと成長させていったことを確認するととどめたい。

直隸・浙江方面における「嘉靖大倭寇」は嘉靖36年にはほぼピークを過ぎ、次第に「倭寇」活動は福建・広東方面へとその主舞台を移して行く。本文で考察した江南方面の「大倭寇」は大規模な活動ではあったにも関わらず、その時期を境にあっけないほど急速に収束していく。その後の福建・広東方面での「倭寇」活動が嘉靖末年から万暦初期までの比較的長期にわたって続くのに比べて江南方面の「大倭寇」がなぜかくも激しく消長したのか、この問題の解明は当時の江南地方の社会状況の分析と不可分の関係にあると思われる。

特に本文の後半で触れた竈戸・沙民といった海民的性格を強く持つ住民たちの「倭寇」への参加という現象の解明は、「嘉靖大倭寇」「後期倭寇」といっ

た枠組みに限らず、マージナルな存在であったと思われる「倭寇」像そのものの考察に深く関わってくる課題であろう。この問題については今後より綿密な検証を行ってみたい。

註

- (1) 石原道博『倭寇』（吉川弘文館、一九六四年）。ほかに倭寇の通史的著作としては田中健夫『倭寇—海の歴史』（教育社歴史新書、一九八二年）が古典的存在である。
- (2) 「後期倭寇」の実態を巡る議論として代表的なものは、一九六〇年代に王直ら密貿易に関わる中小商人層が郷紳層などの搾取および海禁政策に反対して起こしたものと定義した片山誠二郎氏、それを批判し郷紳層との関わりを重視した佐久間重男氏の研究、王直の侵寇活動との関わりを否定し彼を平和的海商と位置づけた李猷章氏の研究などがある。こうした日本での研究動向と意外に似た論争経緯をたどった中国の学界動向については熊遠報「倭寇と明代の海禁—中国学界の視点から」（『中世後期における東アジアの国際関係』1997、山川出版社、所収）に詳しい。
- (3) 村井章介『中世倭人伝』（岩波新書、一九九三年）など。一方で前期倭寇に関してはそのマージナル性、高麗・朝鮮人の参加に疑問を呈する浜中昇「高麗末期倭寇集団の民族構成—近年の倭寇研究に寄せて—」（『歴史学研究』第六八五号、一九九六）、李領「高麗末期倭寇の構成員に関する一考察」（『韓日関係史研究』五、韓国玄音社、一九九六）および『倭寇と日麗関係史』（東京大学出版会、一九九九）の第五章「高麗末期倭寇の実像と展開」といった論文も発表されている。
- (4) 吉尾寛「明末における流賊の「奸細」について」（名古屋大学東洋史研究報告書7、1981）および『明末の流賊反乱と地域社会（2001、汲古書院）I-第三章 流賊の「奸細」と戦法
- (5) 竈戸に関しては彼らが「倭寇」に参加したとされる一方で、官軍側が彼らを倭寇対策に利用しようとしていた側面もあるが、本稿ではその件については論考しない。